

国分一太郎の文集づくり

戸 田 金 一

On His Class Anthology made by Ichitaro Kokubun.

Kin-ichi Toda

はじめに

本稿は、昭和初期の生活綴方運動に関連して、当時、山形県北村山郡長瀬小学校訓導であった国分一太郎が、担任学級において編集作成した文集について、紹介あるいは考察するものである。

本稿を執筆するにいたった動機は、すくなくとも次の二つを含んでいる。

その第一は、筆者の秋田県教育史研究の進展として、昭和59・60両年度にわたり、文部省科学研究費補助金をえて、「北方教育における北方性教育運動展開の実証的研究」の課題に取り組んでいるが、その成果の一部発表である。この研究目的は「昭和初期秋田に興った『北方教育』同人たちの活動が、なぜ北日本国語教育連盟を組織し、いわゆる北方性教育運動の展開に至ったか、その過程および背景をも含めて、実証的に明らかにする。その際、関係各県の生活綴方教師たちとその作成文集の特徴を通じて、特に東北一円に共通する封建遺制と経済的貧困の克服に向けて努力した教職の在り方を考察する」というにあった。いきおい、学校文集あるいは学級文集など、第一次資料の収集にあたることと、当時の生活綴方教師など関係者に面接しての聴き取り調査が研究実施上の重要な点となった。となれば当然のことながら、国分一太郎を抜きにしてのこの研究はない。なぜなら、秋田の『北方教育』の同人たちと、他県の生活綴方教師たちとを結びつける、つまり北日本国語教育連盟の組織化への一つの決定的な役割を、かれは果たした。このことは、すでに簡単ではあるが、拙著において触れたとおりである。^[1]かれについてのいっそう詳細な考察は、その機会の到来をまっていたのである。

第二は、国分一太郎の1985年2月12日の死に対する、筆者の哀悼の意の表現である。この心情は、上記研究の進行途上における筆者の国分との面接が、よもやの最後の別れとなった出あいの印象によるところが大きい。すなわち、1984年8月10日～11日の第24回青森県小学校国語教育夏期研究会は、青森市民文化センターを会場に開催されたが、そのとき国分は講師として招かれて、講演をしている。これを好機として、筆者は青森に出かけ、国分との面接を果たした。かれとは、すでに面識があったのであるが、とりわけ成田忠久が編集した（未刊稿本）『手紙で綴る北方教育の歴史』の公刊の可否について、そのなかに多数の発信書簡が含まれている国分の分についての了解を、直接にとりつけなければならなかったし、またかれの作成文集の在所等の教示をもえなかった。この用件は幸いにも済み、長瀬小学校における文集保管のことを教えていただくとともに、後日の東京での再会の約束や、間もないかれの新著発刊の案内をえたりした。後者が、同年9月30日発行の『小学教師たちの有罪 回想・生活綴方事件』（みすず書房）である。筆者の研究推進には、きわめて有益な文献であり、この内容について、直接にいっそう詳しい説明をえ

たいところもあり、その機会をつくることを楽しみに考えたのであった。が、その矢先きに他界した。痛恨の至りの衝撃に襲われた。いまは不帰の人となった国分一太郎の鎮魂の証しとして、まだ研究途上のために不十分の誹りを免れないとはいえ、急拠本稿を起こし、かれの霊に捧げたのである。

1. 国分の作成文集と戦前発行情集

(1) 国分一太郎の作成した文集

1911年(明治44)3月生まれ、30年(昭和5)3月に山形県師範学校を卒業し、生地東根町(現東根市)の隣村長瀨村(現東根市)の長瀨小学校に勤めた。かれの教職歴は、以後38年3月までの8年間をここで過ごした。

この間に作成した文集を、順を追って挙げてみると、次のとおりである。

表1. 国分一太郎作成 文集一覧

| 番 号 | 文 集 名 | 作 成 年 月 日 | 対 象 学 年 級 |
|-----|----------------------|-------------|-----------|
| 1 | 文 集 が つ ご 1 号 | 1931年2月9日 | 尋四男 |
| 2 | “ “ 2 号 詩・習作 | 32. 1. 6 | 尋五男 |
| 3 | “ “ 3 号 | 32. 2. 8 | “ |
| 4 | も ん べ 第 1 号 | | 尋 三 |
| 5 | “ “ 第 2 号 | 33. 7. | 尋四男 |
| 6 | “ “ 第 3 号 | 33. 11. 3 | “ |
| 7 | “ “ 第 4 号 詩の集 | 34. 2. | “ |
| 8 | “ “ 第 5 号 第二・三学期作品研究 | 34. 4. 25 | “ |
| 9 | も ん べ の 弟 第 1 号 | 34. 10. | 尋三男女 |
| 10 | “ “ 第 2 号 生活詩集 | 35. 1. 1. | 尋三男 |
| 11 | “ “ 第 3 号 詩とはがきの本 | 35. 2. 11. | “ |
| 12 | “ “ 第 4 号 詩集 | 35. 6. 20. | 尋三・四男 |
| 13 | “ “ 第 5 号 | 35. 11. 15. | 尋四男 |
| 14 | “ “ 第 6 号 五十八人作品集 | 36. 2. | “ |
| 15 | “ “ 第 7 号 詩集号 | 36. 6. 25. | 尋五男 |
| 16 | “ “ 第 8 号 | 37. 2. | “ |

いちべつして判明するように、最初の受持学級の尋常科四年男子学級から、早速に文集が作成され、以後休むことなく続くが、最後の年1937年4月から翌38年3月退職時までの年は欠けている。(2)

この間、1933年から次第に文集作成の頻度が増し、かれの文集作成への熱意のかたまりが伝ってくる。

(2) 戦前における文集の発行

戦前の綴方の盛行は、文集の多数発行によって、その概要が把握できる。梶村光郎が研究論文(3)のなかで、『綴方教育』(4)と『教育・国語教育』(5)との2誌で紹介した「文集の年間冊数を基礎にし、欠号や未掲載号、及び主宰者の変更を考慮して作成した年間寄贈文集の推量推移表」

表2. 戦前における文集発行の概況（梶村光郎論文より）

（単位 冊）

| | 綴方教育 | 教育・国語教育 | | 綴方教育 | 教育・国語教育 |
|-------|---------|---------------|------|---------|-------------------|
| 大正 15 | 7 4.4 | | 昭和 9 | 6 9 8.4 | 1 0 6 8 (1 2 7 0) |
| 昭和 2 | 9 3.6 | | 10 | 9 1 0.8 | 1 2 7 2 |
| 3 | 8 8.8 | | 11 | 6 4 4.4 | 8 4 7.2 …… |
| 4 | 1 8 6 | | 12 | 3 7 2 | 5 5 2 3 0 0 |
| 5 | 2 0 7.6 | | 13 | 2 3 7.6 | …… 2 3 4 |
| 6 | 2 3 1.6 | | 14 | 1 9 6.8 | …… 1 6 0 |
| 7 | 3 6 3.6 | 5 8 8 | 15 | 1 2 1.2 | 3 7 2 1 4 4 |
| 8 | 3 9 1.2 | 4 7 4 (6 0 4) | 16 | 9 9.6 | 3 3 8.4 …… |

は、表2のようである。

この表をみて、昭和10年すなわち1935年前後の「最盛期」が判明する。そして梶村はこの35年前後の、『教育・国語教育』32か月分と『綴方教育』31か月分により、府県別文集発行状況を列挙している。そのうち、北海道と新潟ならびに東北各県分を表示すると次のようになる。

表3. 戦前最盛期の文集発行の概況（梶村論文により作成）

| 県名 | 綴方教育 | 教育・国語教育 | 県名 | 綴方教育 | 教育・国語教育 |
|-----|------|---------|----|-------|---------|
| 北海道 | 9 5 | 1 3 4 | 山形 | 2 4 | 6 5 |
| 青森 | 1 2 | 4 2 | 宮城 | 5 1 | 1 7 8 |
| 岩手 | 4 8 | 1 4 4 | 福島 | 7 0 | 1 8 3 |
| 秋田 | 1 6 | 2 7 | 新潟 | 1 2 4 | 1 9 0 |

この表では、秋田の僅少数に驚くであろうが、それはこの両誌等の読者の組織化（支部加盟しているか否か）に関係があり、『北方教育』への組織化の進んでいた秋田の同人たちが、両誌に作成文集を寄贈しないことなどが反映している。

いずれにしても、この時期、全国的にたいへんな数量の文集が作成されたのである。

（3） 国分一太郎の作成文集の水準

前項に指摘したような、数多い文集ということになると、当然、佳作もあれば駄作もあるといわなければならない。

国分一太郎の作成した文集はどうであったか。いまここでは、評価の基準（理由）を示さないまま、結論だけを述べて置く。

「昭和七、八年は学校文集や学級文集などの制作がさかんになった年である。それは文章制作の最盛期といわれる昭和十、十一年の前期的時代といえよう。この期におけるもっともすぐれた実践としてあげられるのは、やはり国分一太郎の文集『もんぺ』をめぐるしごとであろう。」⁽⁷⁷⁾⁽⁶⁾

この評価には、実物に接した上での比較をもととした感想として、筆者は同意する。国分のしごとは、生活綴方の指導の模範となる、創造的なしかも水準の高いものであった。

2. 国分の文集作成の歩み

本章では、国分の文集作成における意図を中心にして、その歩みをみていく。

（1） がつこ 1号

国分が長瀬小学校に赴任して、最初に受持った尋四男級の文集である。表紙のページに「ことば」として、国分はこう書いている。

- ・ みんなで！
- 一．僕たちはねがって居た。
 - ・ みんなでよくなろう——。
 - ・ みんなでしらべよう——。
 - ・ みんなで美しくなろう——。
- 二．みんなの力で出来た文集だ。
 - みんなでよまう。

そして扉のページでは、文集名について、「がつご 一．長瀬ことば 二．ほんとの名 あし、よし 三．大昔、ぼくらの村が沼のそこだった頃、一面に生えてた草。雀のおやど かりがねのやすみば。」と説明している。

内容は、大きくは6章に分かれ、「一．田植中の日記 2篇 二．へびのきも 23篇 三．秋の文集 20篇 四．小さい時のこと 4篇 五．その外 6篇 六．ほだほだ勘吉 国分の創作」で、扉から数えると、49ページ。表紙をも入れると、騰写用原紙26枚を切った（製版した）ことになる。（文中の／は改行のあったことを示す。□は不明文字。以下同じ。）

この処女作の編集後記として、国分はこう書いている。「おしまいに／ いよいよ僕らの文集ができました。／ みんなでよんで見ませう。／ × ／ 僕らの文はまづいかもかもしれませんが、ちよどま^だう^まない柿の実です。／ まだ、しぶいんです。／ しかし、これから^ま甘くなるんです。／ 僕たちには、「これからだ」と言ふことばがあるんです。／ × ／ 自分の文、他人の文をよくよんで見ませう。そして次の文集にはもう少し立ばなものをのせませう。／ × ／ はっきりと書きたいことがわかるか。／ はっきりと書けたか。／ これが大切です。／ × ／ もう五年生になる日も近くなりました。／ □ん□ん、がんばらう。／ 昭和六年二月九日」この集の42ページ目に、「このごろの綴方をみて皆さんへ」という、指導指針が「かくことがらについて」「かく時」および「かいたら」の3項にわたって示されてもいる。

(2) がつご 2号

持上りとなった五年男組の詩集である。その扉には「詩・習作 一号」とあって、次のような巻頭のことばを国分は書いている。「僕たちは ほんとの 途中に居るんだ。／ ぐんぐんすゝんでるけれども、ほんの 途上に あるんだ。／ 進んできたあとをふりかへるしるしとして、／ 第一号は 習作 だけだ。／ そしていつまでもさうかもしれない」

ここには児童の作品詩(37人)41篇の他に、山村暮鳥・中川一政の詩、国分のもの2篇を含み、29ページの文集となっている。28ページに国分は「僕らの詩について」という指導指針を書いているが、「まだ、ために作って見たんです それで習作としてのこしておくつもりなのです。研究するのです。」というとともに「この次からはもっと／

- | | | |
|---------------------------|---|--|
| 1. 僕の、自分の 2. 自分ら 僕ら | } | ◎◎ 生活からもどんどん詩材をさぐって下さい。」と書いている。そして末尾に「次の予定・文集」とし「寒やすみに出ませう」と結んでいる。この日付が「一月六日」であることは、綴方教師の文集作成には、まさしく盆も正月もないことを示唆している。 |
|---------------------------|---|--|

(3) がつご 3号

予定通り、寒やすみの2月8日に文集を作成した。編集後記「最後に」のなかで、「今年は私の入営で思っただけの仕事はしないでくらしした。／でなかったら、三号だなんて今ごろ言ってる

んじゃなかったのだ。」というように、綴方教育への意欲の片鱗を示している。この号は55ページ。

そしてこの号の重要さは、国分の扉ページの巻頭言「僕らの綴方」によって示される。次の通りである。

僕らの綴方

1. 今までの僕らの綴方は、遊んだことばかりだった。
2. 今までの僕らの綴方は、自分のことだけしか書かなかった。
3. 今までの僕らの綴方は、力の無い綴方だった。
4. 今までの綴方は、うまくかくことにばかり一生けんめいになる綴方だった。
5. 今までの綴方には、作者のしっかりした考がなかったのだ。
6. 今までの綴方には、調査がなかった。

これからの僕らの綴方は どう進まねばならないか。

1. 自分のあそんだこと、したこと、みたこと、聞いたことばかりであってはならない。僕らが「世の中」にくらしていることは知っていた。僕らが世の中の一人として、くらしていることを考へたら 僕らだってもっと世の中の事に眼をむけねばならぬ。
2. 「何故この綴方をかいたのか」がはっきりしなくてはならない。それには生活について「深い反省」が大切だ。そこから自分の「しっかりした考」を出さねばならない。「考のある」「力のある」綴方もここから生れる。
3. 自分の考をしっかりわからせるには、自分がなぜさうしなければならなかったかをわからせるには世の中が、又世の中の人々がなぜさうしなければならぬかをわからせるには、かくことがらを、「よく調べねばならない」のだ。
4. うまくなくともよい。ハッキリせねばならない。まづくとも、心をうつものがなければならぬ。

これは国分の生活綴方教師としてのいちだんの飛躍を意味する。この文集作成の前に、前記のように「私の入営で思っただけの仕事はしないでくらし」と、短期現役として入営する。しかしこの入営中に「わたしは兵営あてに『教育研究』と岩波の『思想』を送ってもらい、『綴方生活』と『教育・国語教育』（昭和六年四月創刊）は、日曜日の外出のとき、小白川の村山俊太郎の下宿先で読むのをたのしみにしていた。なぜかといえば『綴方生活』は昭和五年後半から六年にかけて、次第に尖鋭化し、とても中隊長の検閲は通るまいと思ったからだ。」（『山形教育』五〇号記念）⁽⁷⁾と懐想しているように、生活綴方と社会主義思想とへの接近があった。このうちの前者については、除隊後の活動へのまさにエネルギーの蓄積に相当するものとなり、「がつご3号」作成に至る歩みには、前年までとは相違した学習経験を、かれは経ていた。

こういう背景から生まれた3号は、児童の作品を掲載するとともに、下段3分の1を作品検討（研究）欄として、積極的具体的な指導に乗り出した形をみせている。例えば、奥山礼治の創作童話「馬鹿な狐」では、「1. どんなことを言いたいのか 2. どこだ面白いのは 3. 不思議に思ふところはないか 4. もっとはっきりさせねばならぬところはないか」と書いている。

綴方作品23篇についても、最初の10篇にこの指導欄が同様に設けられている。なお、「詩・作品」5篇がそえられている。

（4） もんぺ 2号

「もんぺー2ー」と表紙に、「2号—もんぺー7月」と扉に記載された文集が、1933年7月に発行された。したがって、これ以前に「もんぺ 1号」が存在するわけであるが、長瀨小学校で

もこの号が欠けていて、現物を実見できない。

「がつご 3号」を1932年2月8日に作成したあと、3月6日の長瀬小学校学芸会当日、国分は会場から楯岡警察署の留置所に連行される事件にあった。同月2日、村山俊太郎検挙と関連をもつ、山形県の教育労働組合事件（当時のいい方で教員の赤化事件）に巻き込まれたのである。

国分は釈放されるものの、東根小学校長の監視のもとで「『更生の道』を歩まねばならなくなった。（中略）それで昭和七年三月から、ごく地味な綴方教育の研究に心を向けていった」（『山形教育』五〇号）⁽⁸⁾という新しい事態のなかに置かれた。六年生担任をはずされてしまい（持上りにならず）、三年生の新担任となった。こういう事情は、国分にとって前項で指摘したような意欲の高まりに、水を差されたような1932年（昭和7）度の送り方となったといっておく。

さて、「もんぺ 2号」は、前年度の停滞を、転じてむしろ充電期といってもよいような結果をみせる成果となっている。

扉で国分は巻頭言として次のような「もんぺのことば」を高らかに宣する。

もんぺのことば

僕たちはもんぺをはく。けれどももんぺをはいてさへるれば、「もんぺ」の子供ではない。

「もんぺの子供」は

- 一 はたらくことがすきでなければならぬ。
- 二 よく仕事をおぼへねばならぬ。
- 三 よく生活について反省せねばならぬ。
- 四 よく自然を、人を、村の生活を、観察もなければならぬ。
- 五 よく協働^{クワドク}せねばならぬ。僕らのユニホームのどかりがねマークのやうに、列をそろへて、助けあはねばならない。
- 六 からだの生活に気をつけねばならぬ。
- 七 そして、そこから「よい生活の文」を、「よい考」をつくりあげねばならない。

かうして僕たちは、「もんぺの子供」である。

この第2号は30数ページ（長瀬小学校保存物は19ページまで）であり、かれのしごととしてはウォーミング・アップのような感じである。

（5）もんぺ 第3号

第3号はB5判100ページの文集（特別号）、第4号（詩の集）は57ページ、そして第5号に至っては156ページという部厚い大作となる。

まず第3号に戻って、目次ページ上欄の「もんぺのことば」をみると、これは国分の詩である。「もんぺの子供たちよ／ いよいよ／もんぺをはく時が来た。／もう冬は／そこまで来てゐるのだ。／冬があるから／もんぺがある。／もんぺは君達を／つよくしてくれる／しまりよくしてくれる／体と心をきたへてくれるのだ。／もんぺのみんなよ／——もんぺのほころびはぬってもらったか。／——もんぺのひもはいいか。」

この号の特徴として、綴方かるたがある。国分が「このカルタをよんでみると、頭の中に、目の前に、長瀬の生活がはっきりとうかんでくる。そこがいい。このカルタは長とろの『生活カルタ』だ」（18ページ）と評した長瀬かるたで、三グループ各組のものが掲載されている。

（6）もんぺ 第4号 詩の集

「もんぺの子／もんぺの子供達よ。昭和九年がもう来たと思ったら、もう二月がやって来た。寒い冬と戦って君達のもんぺも、きれいだらう。又よごれて黒光りが出来てゐるにちがひない。／けれども、もんぺの子供達の体と心はすすすくとのびて、がんと丈夫になってゐるのだ。／立春^{リウシュン}もすぎた。空の色を見ろ。吹雪の空にもどことなしに春のあかるさが来てゐる。／光

がほしい。まどをひらきたい。雪もきえろ。土手の雪もきえて、土もくづれろ。ふきのとがもえたら、古いもんペをぬいで五年生だ。それまでは冬だ。風邪をひくな。心をきりゝとさあ行かう。／ 二月十一日がかかる。皇太子様の御祝も近い。」これが扉裏ページの目次の上欄に国分が綴ったこの号の巻頭言である。

そして中扉の次ページに「詩をさぐれ」という1ページの文話がある。そのなかで、「しかし、ぴかりと光らなくとも、キラキラしない所にでもやっぱり詩があるのをわすれてゐた。それは私たちの生活の中に詩があるのに、あんまり気がつかなかったのだ。生活の中から詩をさぐれ。」と強調している。

編集後記にあたる「おしまいに——先生から」のなかで、「綴方は五号までまってくれ。そのかはりこの四号には みんなの詩が、一つや二つはかならずのってるぞ。」と書いている。この組の子の数は51名である。

(7) もんペ 第5号

もんペ第5号は、1934年4月25日つまり新年度になって発行された。扉の巻頭言に国分はこう書き出している。「私たちは生活の跡をのこしたばかりではいけない。生活の跡を反省してみて、その次の生活へすゝまねばいけない。五年生になってもこれは同じだ」この考えでこの号は「生活の跡」のタイトルのもとで「第二・三学期作品・研究」と銘うたれた。前述のように156ページに及ぶ大作である。

だが、奥付の発行者欄をみればわかるように、「尋三→尋四へ生活協働者／もんペの子 五十一名／国分一太郎」とあるように、五年生に進級した子らの担任としては、この文集を使用することはできなかった。

文集を作成したのは、編集後記「書き終へて、もんペの子らよ」にのなかで「僕はこんど新しい三年生たちの仕事をみっちりやらねばいけない。だから、『もんペ』もこれでおしまひになるだらう。／ いいか——この本をもとにして、五年生からは一人でぐんぐんやれ。」と書いて期待し、終りに「僕は長瀬の先生。みんなは長瀬の生徒。みんながしっかりのびればうれいし、みんながなまけたら、僕はやっぱりしかってやりたいと思ふ。」で結ぶ格別の想いをもつ学級であったからであろう。

(8) もんペの弟 第1号

ふたたび三年生の担任となった国分は、新たな綴方教育への歩みを進める。10月には早くも『もんペの弟 第1号』を作成した。巻頭言では、「なぜ、もんペをはくのだらうか」に答えて「2. さうだ。／もんペは働くために出来たのだ。／からだを、きりりとひきしめてはたらくために出来たのだ」「4. だから、もんペの弟たちよ。／お前たちははたらく子供にならねばいけないのだ」と生活への指針を与え、そして「5. もんペの弟たちよ、なぜお前たちは弟か。兄貴がゐるからだ。けれど弟たちよ。兄貴にまけない弟がほんとの弟なんだぞ。な。」と、文集の名の由来を書いている。

そして「生活の勉強(もんペの弟たちよ)」という第一ページで、「綴方では本の勉強をするのではない。自分自分の生活(くらし方)をべんきょうするのだ。よく思ひ出して、よく観て、よく考へて、よくかいて、そして私たちの本をつくるのです。その本はみんなのやくにたつのです。」と生活綴方の原理を明快に展開している。

(9) もんペの弟 第2号

この号は生活詩集である。編集後記の「もんペの弟よ。先生をとりまいて集れ」のなかで、「去年は米のでない年。／みんなの人々からいろいろ心配していたぞいた。／「光」⁽⁹⁾の先生からもらったみかん。益雄⁽¹⁰⁾さんからもらった手紙／峯地⁽¹¹⁾先生からもらった綴方字引、／

みんなが九つ、十の年で、先生が二十四の年は米の出ない年だった。」と、凶作の記録とともに、近藤益雄や峯地光重らとの交友を記している。

男子児童60人全員各1篇を所収している。

(10) もんべの弟 第3号

「詩とはがきの本」と特集名が附されている。前号の「生活詩集にのらない詩」と新しい「昭和10年からの詩」17篇があり、続いて「葉書勉強する前に」の文話と児童の作品（国分あての葉書）16篇を掲載している。

この号からB4判のワラ半紙を横長にして（つまり折って袋とじにしないで）編集している。

(11) もんべの弟 第4号

2月から6月にかけての「詩で生活を勉強する」特集である。児童は三年から四年への持上りである。B4判33ページ。児童は一人へって59人。珍らしく、巻頭言を欠く。「おしまいに」のなかで、「なかなか出来なかった『もんべの弟』だった。やっと出来た。『さあみてくれ』としかいふ言葉がない。」と書いている。

表紙の右上欄の空白部は「休中の生活画をかくところ」、左側空白部は「休中の私の詩」をかくところであるから、児童ごとにこの文集の表紙は、画と詩とが相違する。

(12) もんべの弟 第5号

ふたたびB5判で編集。巻頭言は「出場」という「茸取の上手なお爺さん」の話（創作かもしれない）。27ページに「くはしく書く」の指導文がある。

「昭和十年九月十四日土曜日。私達は手旗のこどもたちをむかへた。」と、宮城県亘理郡吉田小学校校鈴木道太^[12]（本名銀一）学級の子らを迎える。児童たちの「鈴木先生たちをむかへる 福永喜一郎」をはじめとする作品のほかに「鈴木先生からの手紙」が掲載されている。生活綴方の『もんべの弟』と『手旗』の子らの交歓という事実が厳然として存在したのである。

なお、この11月15日発行の編集後記「おくれた文集につけることば」のなかで、商業主義との比較での文集発行の意義をこう書いている。「商売人のつくった雑誌なら、もう少したつと新年号もくるだらう。それはたゞ面白くただ珍らしくつくればよいからだ。ところが、僕たちの文集には、自分自分の生活をほんとして来たあとを、しっかり考へ、しっかり勉強して、少しでもよくなった所がわかるやうにつくらねばならない。だからおくれた文集だって、私達はなげられない。なげなくともよいのだ。」これは「八月の夏休中の日記などをあはせて」編集したための季節感のズレへの弁明ではあるが、一方にたしかに商業主義の興味本位への批判でもある。

(13) もんべの弟 第6号

もんべの弟のなかまはまた一人へった。「この度は58人の作品を一つづゝのせませす。二つ以上はけっしてのせませせん。」が巻頭言真っ先きのことばである。そして次いで「『心から生まれたことば』は、行をわけてかいても、わけなくても、その力はおなじです。その心は同じです。／それで、みちかい綴方のやうにかいてのせませす。かうすると、紙もたくさんかかりませんでした。」と書いている。

こう操作しても、この文集はB5判31ページである。

編集後記「おしまひにつけたいことば」の欄に、梅津としを発信のはがきを紹介し、級友「伝七君のお母さんが、なくなったことを大へんかなしんで、をしへてくれてゐる」ことを評価し、「伝七くんの悲しみを、自分も悲しんでくれてゐる。先生にも悲しんでくれと教へてくれた。／

みんなよ。かうでなくてはならない。ひとりのかなしみをみんなでかなしみ、一人のよろこびをみんなでよろこんで、僕たちはたすけ合はう。力をつけよう。」と、今日教育原理で説く「学級心」形成の指導を記録している。

(14) もんべの弟 第7号

「四年生が終る頃の詩」と「五年生からの詩」である。扉の背の目次ページ上欄には、五年生
の一篇の作品がある。

罐 拾 び 5 阿 部 平 蔵

がらがらいはせては行って行くごみすてば
つぶれた鉄をひろって
ぶっくれこうりに入れる
又ひろって また入れる
はりがねも入れる
これを売って 錢をとる
その錢で文集をつくる
もう十五錢たまってゐる
まだまだたまるのだ
早く買ひに來い
すみだはらに十束たまってゐる
早くかひにくるとよいな
うれしくて がらがらひろふ
富治君たちにまけないでひろふ
早くかひにくるとよいなあ

四年生の冬は大雪であった。そのなかの生活のしぶりの詩があつて、五年生に進む。そのよろこびは、「うれしい」という福永喜一郎の詩ではじまる。「はじめても、ひきをはいた。／ ちゃんとでたつたら／ ぐはいのよい／ 『うれしいなあー』（後略）」 子どもたちは成長していく。

(15) もんべの弟 第8号

「秋から冬へ・春へ」と五年生たちは進む。「もんべの村新聞が時々出て、大事なことは、すぐのので『もんべの弟』は第七号でやめてゐました。／ 今みんなが一年間の思ひ出の本をつくつてゐるのを見てみると、私もだまってゐられないので『もんべの弟』をつくることにしました。」が、この号の書き出しである。「この本には、短いことばで毎週木曜日の昼休みにかいた作品をのせてみます。長い文はひとつものせません。」ということで「この8号は詩集といつてもいいでせう。」そして「こたつの中や、ひなたぼっこの軒下で、こゑをたててよんで下さい。／ そして六年生の一年間で、どんな生活をどんなにして行くか、どんなにかいて見るかと考へて下さい。この本のなかみも六年への土産です。」と結んでいる。何か、六年生への持上りのない別離を覚悟した気持を感じる表現である。

B5判64ページ以上（長瀬小学校現存のもの65ページ以降欠）の文集である。

3. 国分の文集における特徴についての一考察

(1) 卒業年学級文集の欠落

宮城の鈴木道太は、1934年に国分一太郎に手紙を差出し、その返信に接したときのことを「県外の綴方人から始めてもらった手紙で、しかも私は正しく一級品を最初に射当てたのである」¹¹³と書き、その後前述の児童交歓のことに触れたように、きわめて親密な間柄へと進むのであった。筆者は、国分の別の書簡を読んだことがあるが、さもなりなんと首肯できる。鈴木がいう一級品

とは、書簡もさることながら、綴方教育の実践的指導者であるとともに、その理論家としてでもあることを含んでいる。

すなわち、綴方教育界にあっては、国分は『もんぺ』から『もんぺの弟』へと及ぶにつれて、注目され知られた存在となっていく。¹⁴⁾ だが、山形県教育界の官僚や校長たちにとっては、要注意人物であった。それが、国分に尋常科六年生（卒業年学級）を担任させなかった理由である。したがって、かれの作成した文集には、六年生の作品集はない。前章で触れたが、『もんぺ 第5号』は、尋四から尋五への持上りを念頭にして、文集成成を意図したと考えると自然な理解となる。新尋三（この頃は、三年生まで男女共学学級編成で、四年生以降男女別学編成）の担任でありながら、4月25日に156ページという最多ページ量の文集を、五年生の元教え子たちのために発行する。どんなに『もんぺ』の子らが国分にとって可愛かったか、はかり知れない。しかしそうであればあるほど、持上りたかった国分の気持は踏みにじられた、といえる。

このことは、『文集 がつご 第3号』の尋五より尋六へのときも同様であるが、このときは、その事件直後だから、やむをえないと観念するところもあったろう。だが、その事件後2年経過しても、いぜんとして要注意人物としての処遇をうけたのである。

このことを、国分自身（書簡）によって語らせよう。秋田の佐々木昂（本名太一郎）が土崎男子尋常高等小学校（30学級）から前郷尋常高等小学校（14学級）へと転任になる1934年3月の人事異動は、『北方教育 第十四号』の記事によれば「今春三月元老小笠原の逆鱗にふれ」たトバサレタものであった。これで滅入っていた佐々木を、何人もの者が書簡を寄せて激励するのであるが、そのひとりが国分であった。長い書簡であるがその一節は、次のようである。

「真実がかへりみられない社会が出来たとしたら、もうその社会は無価値だ」と成田さんが、この度もいってくれてゐますが、こんな社会が、私達のグルリに、いともしつように、いとも謹厳に、形成されつゝあることをいつも感じては、一つの戦ひの心を感じてゐる僕です。

でも、戦ってみてもだめだといふ事を僕はもう昨年の夏休ころから⁽⁷⁷⁾ 覚りぬいてしまって（ひげふにも——）、僕たちだけがつくれた、教室生活だけは、さうしたみにくき生活相をもたらさないために、ほんとに、ただ子供達のために、子供達それだけのために、小さい努力をなしつつづけようと、自己敗北とは知りつつも、結局こゝからこそ、私に出来る自己の実現はあるのかもしれないと、決心してしまつてゐたのです。

でもその子供達さへもが、僕の三年以上の感化度は危険にすぎるとのけ念から、（一つは校長の用意周到さを村人達にみせたいためにも、）——僕がせ負つてゐる「赤かったといふ古いレッテル評価表」——のために、とりあげられてしまふみじめです。¹⁵⁾

国分はこういう自分の体験（心情）を述べつつ、教育実践への敢闘をこそと、「でも成田さんはこれを、指導意識が、広範囲にわたる事だと考へて、新しい子らのためにこそがんばれと教へて下さいました」ということばを添えて、佐々木を（つまり自己をも）励げますのである。

（2）山形県の教育労働組合事件

国分が佐々木に書いた「赤かったといふ古いレッテル評価表」というのは、1932年3月2日に村山俊太郎が、同6日に国分が警察に検挙された教育労働組合事件である。村山らは、起訴こそまぬがれたが、教職を辞さなければならなかった。国分は関わりが薄いということで釈放されたが、既述のように、東根小学校長の監視下にある保護観察的立場であり、「赤化教員」の偏見でみられ、差別されたのである。

山形県の教育労働組合事件に関係する研究考察はいろいろある。¹⁶⁾ しかし、本論では紙数の関係で以上にとどめざるをえない。これによって、なぜ国分の作成文集には、六年生のものがないかの理由として置きたい。

む す び

国分の作成文集から、まだまだ沢山のことを、われわれは学べるし、考察できる。たとえば、学級全員の作品を掲載することの意義、3～5年生の作品として、きわめて程度の高い成果をえた指導法の軌跡、あるいは後期になるに従っての、他の生活綴方教師を意識した文集作成と感じられる諸点のみえること、さらには全国の生活綴方指導者との交流⁽¹⁷⁾などなど、かれの作成文集のなかから、課題を設定して考究が可能であるが、これらは今後の研究課題として残すものである。

おわりに、一連の研究推進の途上において収集しえた文集に限って、付表として掲載する。秋田大学北方教育研究協議会編『秋田大学附属図書館 北方教育資料コーナー目録』第1集および第2集に掲載のもの併せてみると、北方性教育運動の考察に益するところが大きい。

資料収集に当たり、とりわけ本稿に関しては、石島庸男・志村広明両氏ならびに長瀬小学校のご援助が厚かった。感謝申し上げる。

付表 東北地方にて発行された昭和初期の学校・学級文集（秋田大学附属図書館北方教育資料室収蔵以後のもの）

| № | 編 者 | 文 集 名 | 発 行 日 昭和年月日 | 発 行 所 |
|------|----------------|-----------------------|----------------|------------------------------|
| 秋田 1 | 雄勝郡院内小 下山 良治 | 岩魚 第6号 | 8. 7. 25 | 同校 |
| 2 | " " | " 第7号 | 8. 12. 26 | " |
| 3 | " " | " 第8号 | 9. 3. 23 | " |
| 4 | 雄勝郡横堀小 " | 五年生時代 第1輯 | 9. 8. 20 | 尋五教室 |
| 5 | " 太田 哲雄 | 綴方読本 横堀文園 第1輯 | 9. 12. 25 | 国語研究部 |
| 6 | " 下山 良治 | 第三詩集 特輯生活勉強室 生活をきたえる詩 | 10. 7. 30 | 尋六教室 |
| 青森 1 | 南郡山形村東英小 木村要五郎 | 山童 第3号 | 8. 8. 1 | 綴方研究部 |
| 2 | " " | " 第5号 | 9. 8. 1 | " |
| 3 | 青森市橋本小 桜田 志郎 | 永垂 第1巻 | 9. 8. 20 | 同校 |
| 4 | " 福士 秀治 | " 第2巻 | 9. 12. 20 | " |
| 5 | " " | " 第4巻 | 10. 7. 31 | " |
| 6 | 北郡嘉瀬小 土岐 兼房 | 学校文集 呼笛 第2号 | 10. 3. 1 | 同校（校長鳴海民之助） |
| 岩手 1 | 東盤郡矢越村上折小 | 郷土研究 煙草耕作 10月号 | 8. 10. 16 | 第四学級 |
| 2 | | 麓 第3号 | 8. 7. 10 | 田老校 |
| 3 | 宮古小 高橋 啓吾 | 白鷺 | 8. 7. 15 | 尋六 （第二十六教室） |
| 4 | | うしほ 第10号 | 8. 7. | 鍬之崎水補小 |
| 5 | | 青空 第3号 | 8. 9. 28 | 鍬補校 |
| 6 | | 児童文集ふたば 10号 | | 第1年文芸部 高田市外上杉村 上杉小尋三雪組 |
| 宮城 1 | (五ノ嵐勝治) | 尋五女文集 陽丘 第1号 | 8. 7. | 遠田郡小牛田小 |
| 2 | (") | " 第2号 | 8. 9. | " |

| No. | 編者 | 文集名 | 発行年月日 | 発行所 |
|------|-----------------------|--------------------|------------|-----------------------|
| 3 | 遠田郡小牛田小 五十嵐勝治 | ” 第3号 児童自由詩号 | 9. 1. 28 | ” |
| 4 | ” ” | 尋六女文集 陽丘 第4号 | 9. 8. 20 | 尋六女 |
| 5 | ” ” | 尋六自由詩集 山の村 第2輯 | 8. 10. 27 | 宮城郡廣瀬小 |
| 6 | 登米郡寶江小 菅野門之助 | 文集 機関車 3 | 8. 12. 5 | 尋三教室 |
| 7 | 宮城郡荒浜小 菅原 真静 | 稚木林 第2輯 | 9. 1. 1 | 第六学級尋五 |
| 8 | ” ” | ハマノ詩 第2巻 | 10. 1. 6 | 宮城郡荒浜小 一年教室 |
| 9 | 刈田郡齋川小 新川 建 | 山莓 6 | 7. 7. | 尋六教室 |
| 10 | 刈田郡齋川小 遠藤 典男 | 傾斜地 | 11. 3. 20 | 高二教室 |
| 11 | ” ” | 生活の朝 2 農業日記特輯号 | 12. 7. 20 | きゃうだいの組 高二第八学級 |
| 12 | ” 新川 建 | まごたろ子供 4 | 12. 7. 25 | 六年 |
| 13 | ” 遠藤 典男 | 明日のために | 14. 12. 25 | 教育科学研究会 |
| 14 | 廣瀬小 菅野門之助 | 機関車 3 | 8. 12. 5 | 尋三教室 |
| 15 | 仙台市南材木町小 佐々木 正 | 朝 第2号 | 9. 3. 25 | 四年男 |
| 16 | ” ” | カマラード 第2輯 | 12. 7. 4 | ” |
| 17 | 志田郡志田小 氏家 芳治 | 尋六 文集綴方耕土 2 一学期ノ収穫 | 9. 8. 20 | 保柳分教場 尋六教室 |
| 18 | 名取郡岩沼小 遠藤 典男 佐藤九二一 | カマラード No.18 | 24. 1. 1 | 同校 |
| 19 | ” ” | 綴方区 1 | | |
| 福島 1 | ” ” | うすずみ 第3輯 | 8. 8. 14 | 大沼郡高田小 |
| 2 | ” ” | ” 第3輯 | 8. 9. 1 | ” |
| 3 | ” ” | ” 第4輯 | 9. 1. 10 | ” |
| 4 | ” ” | 忘れな草 第10号 | 8. 7. 30 | 相馬郡中村第三小 高等一・二学年女子 |
| 5 | 安達郡油井小 木下 龍二 | 尋四女組文集 目 6号 夏休み号 | 8. 10. 3 | 尋四女組 |
| 6 | ” ” | 松が岡 創刊号 | 9. 1. 28 | 石城郡平第二小 尋五ノ三組 |
| 7 | 西白河郡白河第一小 芦野利貞 | 児童文集 えびのひげ 第2号 | 8. 11. 11 | 綴方研究部 |
| 8 | ” 芦野利貞 上野キヨ 鈴木八十 | ” ” 第3号 | 9. 6. 15 | ” |
| 9 | ” 芦野 利貞 | 鯉 第1号 | 9. 10. 15 | 尋四之一組男 |
| 10 | 福島市福島第二小 小林金次郎 | ひばり 第9号 詩と童話と短歌と日記 | 10. 9. 2 | 六年三組 |
| 11 | 相馬郡中村第三小 武藤 要 | 渚 3号 | 11. 3. 24 | 尋三男教室 |
| 山形 1 | 南村山郡本澤小 綴方研究部 | あおぞら 創刊号 | 4. 11. 20 | 同校 |
| 2 | ” ” | ” 第2号 | 5. 7. 30 | ” |
| 3 | ” ” | ” 第3号 | 6. 7. 30 | ” |
| 4 | ” ” | ” 第4号 | 8. 2. 27 | ” |
| 5 | ” ” | ” 第5号 | 9. 3. 15 | ” |
| 6 | ” ” | ” 第6号 | 11. 2. 11 | ” |
| 7 | ” 井上 寅吉 | ” 第7号 | 12. 2. 25 | ” |
| 8 | ” 三宅 寛一 | ” 第8号 慰問号 | 13. 2. 11 | ” |
| 9 | ” ” | ” 第9号 | 14. 2. 11 | ” |

| No. | 編者 | 文集名 | 発行年月日 | 発行所 |
|-----|-----------------|--------------------|------------|----------------------|
| 10 | " " | " 第10号 | 15. 2. 11 | " |
| 11 | " 三宅傳十郎 | " 第11号 | 16. 3. 15 | 同校 |
| 12 | 南村山郡本澤村 国民学校 | 木村 信一 " 第12号 | 17. 7. 31 | 同校 |
| 13 | 師範学校附属小 | 岡田 賢輝 児童文集 第11輯 | 6. 7. 24 | 同校 |
| 14 | | 文集 | 6. 12. | 男師附属尋四女 |
| 15 | | ふたば 第7号 | 7. 2. 11 | 山形市第一小 |
| 16 | | 文集ふたば 第7号 | 7. 2. 11 | " |
| 17 | 山形市第一小 志田 二郎 | 卒業 | 7. 3. 22 | 同校 |
| 18 | 西村山郡左澤小 綴方研究部 | 文集 | 7. 11. 30 | 同校 |
| 19 | | 文集 2 夏生活文集 | 8. 9. 4 | 最上郡豊里校 尋五教室 |
| 20 | 最上郡豊里小 石垣貞次郎 | 尋五文集 鳥海山 3 | 8. 12. 1 | 尋常五年男女 鳥 海山の見える教室 |
| 21 | " | " 4 | 9. 3. | 鳥海山と月山の 見える教室 |
| 22 | | たくま 第2巻第5号 幼学年部 | 8. 12. | 荒砥小 |
| 23 | | 琢磨 第2巻第5号 高学年部 | 8. 12. | " |
| 24 | 東村山郡金井小 秋葉 清 | 柿の葉 | 9. 1. 23 | 綴方研究部 |
| 25 | " " | " 童詩号 | 9. 10. 22 | " |
| 26 | 最上郡新庄小 綴方研究部 | 児童詩集 とんび 第1号 | 9. 2. 11 | 同校 |
| 27 | " " | " 第3号 | 9. 12. 25 | " |
| 28 | " " | 樅 第1号 | " | " |
| 29 | " " | " 第3号 | 10. 1. 25 | " |
| 30 | | 尋二男文集 ふんしゅう 第2輯 | 9. 7. 9 | 最上郡新庄小 尋二男のふ |
| 31 | 東村山郡天童小 綴方研究部 | いてふの木 第11輯 幼学年 | 9. 3. 20 | 同校 |
| 32 | " " | " 第11輯 高学年 | 9. 3. 20 | " |
| 33 | " " | " 第12号 低学年 | 11. 10. 30 | " |
| 34 | " " | " 第12号 高学年 | 11. 10. 30 | " |
| 35 | 東村山郡蔵増小 田中 新治 | もんべ 第2号 | 11. 3. 1 | 尋六女綴方クラ部 |
| 36 | | 石きり | 9. 8. 31 | 東村山郡天童小 尋三男女教室 |
| 37 | 西置賜郡鮎貝小 高山 勇記 | 土の子 第1号 | 9. 8. | 尋五春組 |
| 38 | | " 第2号 | 10. 2. | " |
| 39 | | " 第3号 | 10. 9. | 尋六春組 |
| 40 | | " 第4号 | 11. 2. | 西置賜郡鮎貝小 尋六春組 |
| 41 | 東村山郡長崎小 石山四郎作 | ざくろ | 10. 3. 20 | ざくろ会 |
| 42 | " " | " | 11. 3. 19 | " |
| 43 | 北村山郡長瀬小 国分一太郎 | もんべの弟 4 | 10. 6. | 尋四男教室 |
| 44 | " " | " 5 | 10. 11. 15 | 尋常第四学年 第三学級 |
| 45 | 西置賜郡中山小 中山 俊雄 | かつら 初めての詩集 夏の生活集 | 10. 9. | (尋五・六) |
| 46 | 東村山郡長瀬青年学校 藻光会 | 藻光 18 | 11. 3. 31 | 同会 |
| 47 | | ブンシュウ | | |
| 48 | 北村山郡長瀬小 国分一太郎 | 文集がつて 1集 | 6. 2. 9 | 尋四男 |

| No | 編者 | 文集名 | 発行 昭和年月日 | 発行所 |
|------|----------------|---------------------|-------------|----------------|
| 49 | " " | " 2集 詩・習作 | 7. 1. 6 | 尋五男 |
| 50 | " " | " 3集 | 7. 2. 8 | |
| 51 | " " | もんべ 第2号 | 8. 7. | 尋四 |
| 52 | " " | " 第3号 | 8. 11. 3 | 尋四男 |
| 53 | " " | " 第4号 詩の集 | 9. 2. | " |
| 54 | " " | " 第5号 第二・三学期作品研究 | 9. 4. 25 | " |
| 55 | " " | もんべの弟 第1号 | 9. 10. | 尋三男女 |
| 56 | " " | " 第2号 生活詩集 | 10. 1. 1 | 尋三男 |
| 57 | " " | " 第3号 詩とはがきの本 | 10. 2. 11 | " |
| 58 | " " | " 第4号 詩集 | 10. 6. 20 | 尋三・四男 |
| 59 | " " | " 第5号 | 10. 11. 15 | 尋四男 |
| 60 | " " | " 第6号 五十八人作品集 | 11. 2. | " |
| 61 | " " | " 第7号 詩集号 | 11. 6. 25 | 尋五男 |
| 62 | " " | " 第8号 | 12. 2. | " |
| 63 | 北村上部長壽小 | 想画指導題材一覧 | | 同校 |
| 64 | 山形第八小 (村山俊太郎) | 生活の本 日支事変と私たち | 12. 10. | 尋五ノ一 |
| 65 | " (") | 綴り方 6月 | 14. 7. 5 | 綴方研究部 |
| 北海道1 | | ふもと 第4号 | 7. 5. 27 | 小樽第二小 高二ノ二組 |
| 2 | | " 第6号 | 7. 10. 17 | " |
| 3 | | 二年綴方研究 | 7. 6. 10 | " |
| 4 | 小樽第二小 山本 實 | 綴方研究第参編 忘れられる平凡な部面 | 8. 3. 15 | " |
| 5 | 釧路市湖畔小 田島 高保 | 湖畔 第2号 | 8. 10. 7 | 同校 |
| 6 | 松島小 栗田正ふみ | 土 第1巻第3号 八月特別号 | 8. 8. 30 | 国語教育研究部 |
| 7 | 亀田郡銭亀小 藤原 行孝 | 赤い夕日 第7号 | 8. 12. 28 | 高等科 第一・二学年 |
| 8 | " " | " 第8号 | 9. 3. 23 | 高等科 第一・二学年 |
| 9 | " " | " 第9号 | 9. 5. 21 | 高等科 第二学年教室 |
| 10 | " " | " 第10号 | 9. 8. 1 | " |
| 11 | " " | " 第11号 | 10. 1. 1 | " |
| 12 | " " | " 第11号 | | |
| 13 | " " | " 第12号 | 10. 3. 20 | 高等科 第二学年教室 |
| 14 | " " | " 第12号 | | 藤原 行孝 |
| 15 | " " | " 第13号 | | " |
| 16 | " " | 黒岩 第1号 | 11. 1. 10 | 尋五の教室 |
| 17 | " " | " 第5号 | 12. 9. 13 | 高一の教室 |
| 18 | 海老名禮太 | 文集 函館の小女 | 9. 1. 1 | 大正堂 |
| 19 | 網走女満別小 小鮎 寛 | 北見文選 四月特輯「綴方教育と大衆性」 | 11. 4. 15 | 北見教育会 綴方研究部 |
| 樺太1 | 樺太公立本斗小 綴方研究部 | ななかまど 第2巻第1号 低学年之部 | 8. 7. 23 | 同校 |
| 2 | 樺太公立豊原第一小 池田宗矩 | もくば 第27輯 | 8. 8. 23 | 保護者会 |

| No | 編者 | 文集名 | 発行年月日 | 発行所 |
|------|------------------|---------------------------|-----------|--------|
| 新潟 1 | | 柏崎郷土読本 | 3. 10. | 柏崎小国語部 |
| 2 | 柏崎小 国語研究部 | 児童文集 砂の丘 第5巻第1号 | 7. 7. | 同校 |
| 3 | “ 国語部 | 児童“ 第5巻第2号 | 8. 1. | “ |
| 4 | “ “ | “ 中 第6巻第1号 | 8. 9. | 国語部 |
| 5 | “ “ | “ 下 第6巻第1号 | 8. 9. | “ |
| 6 | | 青い空 第8号 | 9. 11. 5 | |
| 7 | 刈羽郡教育会 刈羽国語の会 | 酒井 良弼 刈羽教育会主催 教育品展覧会 記念文集 | 10. 2. 20 | 刈羽国語の会 |
| 8 | 小千谷町藤生小 | 木村 英治 桐の丘 第4号 十二月の詩と鑑賞文 | - 12. 29 | 同校 |
| 9 | “ 綴方研究部 | 雪の郷 第8号 | | “ |
| 10 | | ぐみのみ II | | |

注

- 1 戸田金一『秋田県教育史—北方教育編』1979年 みしま書房 pp.340～341
- 2 その理由は「一九三七年末に、ひどい不眠症という病気におそわれ．．．市川市の精神神経科国府台病院．．．に入院した」（国分一太郎『小学教師たちの有罪』1984年 みすず書房 p.199）による。
- 3 梶村光郎「戦前生活綴方運動に於ける綴方雑誌の主導性 — 発行文集の「最盛期」を中心に —」（筑波大学大学院博士課程 教育学研究科編・発行『教育学研究集録 第6集』1983年所収）
- 4 編輯人菊池知勇によって1926年4月創刊されたわが国最初の国語科綴方教育専門の全国雑誌。月刊。1941年廃刊。
- 5 千葉春雄主宰で1931年4月創刊した国語教育の総合的問題を扱った月刊誌。39年4月より『教育・国語』と改題、翌年4月からは『教室』と再改題し、41年6月号で廃刊。
- 6 国民教育研究所編『北方性教育運動の展開』1962年 日本教職員組合 p.109
- 7 前書 p.102
- 8 前書 p.103
- 9 文集『光』の作成者木村寿（宮城県土々呂小学校）と思われる。
- 10 近藤益雄（1908～1964）長崎県の綴方教師。
- 11 峰地光重（1890～1968）鳥取県生まれ。『綴方生活』第二次同人。
- 12 鈴木道太（1908～）宮城県白石町生まれの宮城県的生活綴方のリーダーの一人。なおこの交歓のことは、鈴木『北方教師の記録』にも書かれていない。1985年10月1日の聴き取り調査では、長瀬小学校の購売部活動視察を目的としたが、活動は見るべきほどのものではなかった、と鈴木はいつている
- 13 鈴木道太『北方教師の記録』（『鈴木道太著作選 1』1972年 明治図書 p.114）
- 14 たとえば、国分は「わたしの描く綴方指導系統案」を『国語教育研究』（菊池謙・宮城女子師範学校附属小学校訓導・編）の1935年4月号に掲載するほか、全国各誌に執筆し始めている。
- 15 戸田金一「北方教育研究ノート — 階級性、模範訓導そして魂の技師 —」（藤原教授退官記念会編『地域社会と教育』1983年 無明舎出版 参照のこと）
- 16 山形県の教育労働組合に関する関係論文として、次のものがある。
 - ① 『山形県教育労働組合ニュース 第一号』1931年12月30日（複製）
 - ② 酒井惇一「昭和恐慌期における『貧農的』農民運動の研究 — 山形県村山地方の運動史から」（東

北大学農学部農業経営学研究室編・発行『農業経済研究報告 第6号』1965年)

- ③ 黒滝チカラ「戦前の教育運動の歩みと国分一太郎のこと」(日本共産党中央委員会編・発行『文化評論 No.78』1968年3月)
 - ④ 西塔辰雄『山形県における教労新教運動から北方性教育運動へ ― 村山俊太郎を中心に ―』(1969年8月3日 歴教協大会発表資料)
 - ⑤ 『山形高等学校社会科学研究会と全協・教労部山形県支部組織(資料)』1969年11月
 - ⑥ 田中新治「山形県の教労運動」(労働運動史研究会編『教育労働運動の歴史』1974年 労働旬報社)
 - ⑦ 石島庸男「1930年代山形県における教育運動と山高社研」(1977年 日本科学者会議山形支部『報告5』)
- 17 『もんぺ 第5号』1934年4月の155ページは「私達をそだて、下さる人々」として、父母・祖父母・兄弟姉妹・村の人達のほかに「遠い所から私達をそだててくれる手紙を下さった方々。雑誌にかいて下さった方々。」として、「北方教育社 秋田のお父さん成田忠久先生 秋田の先生加藤周四郎先生」にはじまり、高橋啓吾(岩手県宮古小)・木村寿(宮崎県土々呂小)・近藤益雄(長崎県田平小)・野村芳兵衛(児童村小)・小砂丘忠義・千葉春雄を紹介し、「五年になっても手紙などあげたらどうです。かける人は出して下さいよ。」と国分は書いている。